

【話 題】

8th Pacific Regional Wood Anatomy Conference (PRWAC) に参加して井 城 泰 一^{*,1}

はじめに

2013年10月17日(木)から21日(月)にわたり、中華人民共和国江蘇州南京市のInternational Conference Hotel of Nanjingにおいて開催されたIAWA主催の8th Pacific Regional Wood Anatomy Conference(第8回環太平洋木材解剖学会議)に参加した(写真-1)。この会議は、当初の計画が拡大し、IAWAとIAWSとの合同会議となり、8th Pacific Regional Wood Anatomy Conference / Annual Meeting of International Academy of Wood Science 2013(以下、PRWAC/IAWS)として開催された。PRWAC/IAWSには17ヶ国より191名が参加し、口頭発表が110件、ポスター発表が62件の合計172件の研究発表が行われた。

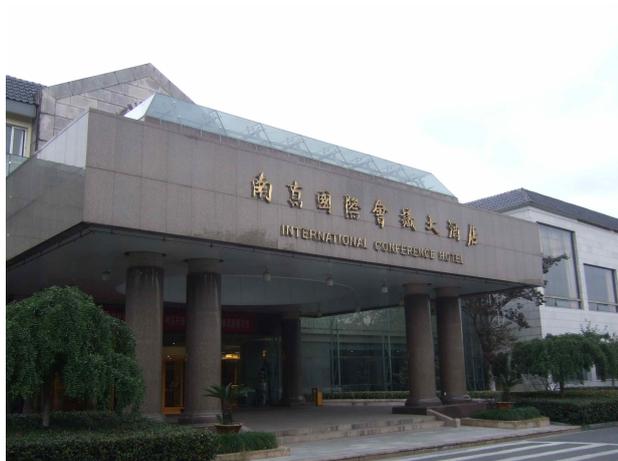


写真-1 会場となった International Conference Hotel of Nanjing

PRWACは、第1回大会が1984年に日本のつくば市で開催され、その後、4~5年おきに、フィリピン、ニュージーランド、韓国、インドネシア、マレーシアなどの各

国で開催されてきた。名前の通り、環太平洋地域の木材組織および材質の研究者が主な参加者であるが、他の地域(ヨーロッパなど)からの参加者もいた。

会議は、10月17日にオープニングセレモニーとKeynote-lectureが、10月18~20日の3日間で研究発表(口頭及びポスター発表)が、21日にエクスカージョンがそれぞれ行われた。なお、台風26号の影響により当初搭乗予定であった飛行機が運休となり、17日のKeynote-lectureの途中からの参加となった。

研究発表

Keynote-lectureは、この分野で著名な研究者であるニュージーランドのLloyd Donaldson博士、日本の高部圭司博士(京都大学農学部教授)、中国のQisheng Zhang博士、Zehui Jiang博士、オランダのPieter Baas博士の5人により行われた。台風の影響で到着が遅れたため、最終演者のPieter Baas博士の講演のみを聞くことができた。

口頭及びポスターの研究発表(写真-2および写真-3)は1) Wood Anatomy、2) Wood Identification、3) Paleobotany、4) Wood Culture & dendrochronology、5) Tree Physiology & Pathology、6) Wood Formation、7) Structure & Utilization of Bamboo, Rattan and Palm、8) Wood Property、9) Cellulose Nanofiber & Bio-Energy、10) Wood Compositesの10分野のセッションで構成されていた。

材質関係(Wood Property)の発表では、インドネシアやマレーシアなどの熱帯早生樹に関する発表が多くあった。例えば、*Hevea*属、*Shorea*属、*Acer*属などを対象に、晩材仮道管S₂層のマイクロフィブリル傾角(MFA)や繊維長といった木材性質の樹幹内変動、またヤング率や密度と成長との関係などについて報告されていた。また、施業によってこれら木材性質がどのような影響を受けるかという研究報告もあった。これらの研究では、まだクロ

*E-mail: iki@affrc.go.jp

¹いき たいいち 森林総合研究所林木育種センター



写真-2 口頭発表の様子



写真-3 ポスター発表の様子

ることから、近年、林木育種においても利用されている方法である。ここでは木材の識別を行った報告であったが、同法を選択した理由はやはり迅速かつ簡易に測定が可能であるとのことであった。

また、タケに関する研究発表が多く見受けられた。これは、中国で開かれたことと関連していると考えられ、日本をはじめとする他の国と異なり、中国ではタケの研究が盛んに行われていると考えられた。

19日の午後には、ビジネスミーティングが開催され、9th PRWAC がインドネシアにおいて開催されることが決定した。最後に本会議開催に尽力された南京林業大学のスタッフの皆さんが紹介され、参加者全員の開催の労をねぎらった (写真-4)。



写真-4 南京林業大学のスタッフの皆さん

ーンや家系といった材料を用いて研究が行われていなかった。スギでは、クローンや家系を用いることで木材性質のバラツキや遺伝性についての研究が進められている。これら熱帯早生樹についても、今後、育種材料を用いることでより研究が進むのではないかと感じた。

著者は、*Inheritance of wood stiffness in Cryptomeria japonica at two progeny test stands created by a diallel mating design* と題してポスター発表を行った。これはダイアル設計のスギ人工交配家系の検定林において、ヤング率やそれに関連する木材性質について測定を行い、遺伝性を評価や成長との関係について報告した。残念ながら、材質育種に関わる発表は1件だけ(見逃している可能性があり)であったが、何人かの研究者より、木材性質の遺伝性や育種の進め方について質問を受けた。

その他の研究発表では、近赤外分光 (NIR) 法を用いた研究が印象に残った。NIR 法は迅速かつ簡易に測定でき

南京林業大学

10月20日の午後に南京林業大学を訪問した。南京林業大学は、北京林業大学と並び中国を代表する林学系大学である。研究関連施設の他に、モデルハウス、学生寮、ホテルなどの施設を敷地内に所有していた。大きな学生寮が建設中であり、多くの学生がここで学んでいると考えられた。今回の訪問では、木材解剖学研究室と林木育種関係の研究室を訪問することができた。林木育種は中国の重点学科となっているようで(写真-5)、精力的に研究が進められていると感じた。研究室には多くの最新鋭の分析機器等が導入されており、学生も多く在籍しているようであった。また大きな組織培養を行う施設もあった。訪問後、大学内にあるホテルで懇親会が開かれた。訪問当日は日曜日であったが、大学内では授業が行われ

ており、熱心に学んでいる中国人学生の姿が印象に残った。



写真-5 南京林業大学において林木育種関係の研究室が入るビルにて。「国家级重点学科」との文字が見える。

エクスカージョン

エクスカージョンは、南京の北東にある揚州を訪問した。揚州はかつての中国経済の中心地であり、日本と関わりが深い鑑真の故郷とのことであった。鑑真のゆかりのお寺である大明寺で参拝を行った後、漢代広陵王墓を訪れた。漢王朝時代に作られた王墓とのことであったが、多くの木材を使用して作られており、古くからの木材の利用やその墓のスケールに感動した。

最後に

今回、初めて国際学会に参加する機会をいただいた。このような機会を与えていただいた林木育種センター海外協力部に感謝いたします。